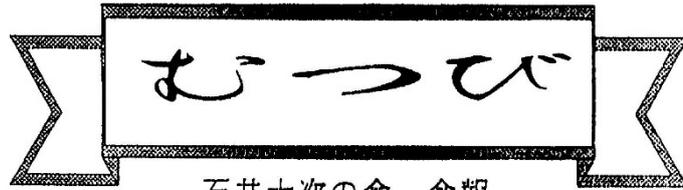


2020年
(令和2年)
3月12日



270号

《石井十次と音楽と私・・・》

川南町長 日高 昭彦

人生は思わぬところで繋がり、組み合わせるジグソーパズルのような楽しみがある。

そのような思いで読んでいただければ幸いです。

私がバラを栽培していた2001年に川南町ではモーツァルト音楽祭が始まりました。町を活性化したいという仲間が集まり、青少年のオーケストラの合宿を受入れたことが始まりでした。私もその仲間に加わり、設立当初から5年間実行委員を務めました。

この音楽祭が始まった頃は、本町の中学校に吹奏楽部がありませんでした。しかし、音楽祭をきっかけに町が楽器をそろえ、唐瀬原、国光原中学校に吹奏楽部ができました。今では、高鍋町の両中学校や高校なども音楽祭に参加し、100名を超える大編成で吹奏楽フェスティバルが開催されるまでに発展してまいりました。

石井十次が日本で最初に孤児院を設立し、「児童福祉の父」ということは、学生時代から伺っておりました。しかし、岡山孤児院時代に音楽隊を編成し演奏旅行まで行っていたことを知ったのは、数年前のことで、大変驚いたことを覚えております。

資料によりますと、“石井十次28歳の明治26年、院の子どもたちに自由を与え、また情操を豊かにするため「風琴音楽隊」を設立。明治31年には「音楽幻燈隊」を編成し、広島県尾道市で初公演をした。その後演奏旅行は日本国内にとどまらず、朝鮮半島、中国、香港、台湾、ハワイ、アメリカ西海岸まで広がり、明治41年まで続いた”、とありました。

西洋音楽が日本に伝わってまだ間もないころに、しかも海外への演奏旅行まで行っていたとは……。現代でも簡単なことではないのに、驚きでしかありません。当時の写真を見てみますと、金管楽器と思われる多くの楽器を前にして演奏者と思われる子どもたちが写っています。

当時の子どもたちは、初めて目にした楽器に驚き、どれほど喜んで楽器を触ったり、吹いてみたりしたことか。また、人々は、はじめて聴いたのであろう音楽隊の音色に感動し、輝きに満ちた新しい時代を確信し、勇気付けられたことでしょう。

絵画や彫刻が「空間芸術」と言われるのに対し、吹奏楽など音楽は、演奏してもすぐに消える「時間芸術」と言われています。その時の演奏はその場限りのもので、同じ演奏は二度と味わうことができない、そこでしか味わうことができないものなのです。

音楽は消えますが、聴衆の心には残ります。演奏者は、いつまでも心に残る感動的な演奏を目指し、個々が腕を磨き、調和のとれた響きを感じ、豊かな表現ができるよう全員が心をつなげて「ワンチーム」になるのです。その過程の中で、励まし合い、指摘し合うなど、支え合う心も育っていくものと思います。石井十次は、音楽活動を通して兄弟のように敬愛する精神を教えたかったのではないのでしょうか。

こうした音楽活動は、孤児院の受入れ人数が1,200名と最も多かった時期の情操教育として、大きな役割を果たしたものと思われます。こうしたことから、石井十次がいかに「先見の明」のある方であったかがよくわかる気がします。

現代社会においても、音楽活動を通じた情操教育の重要性は叫ばれており、前記したモーツァルト音楽祭の馬込勇音楽監督は、石井十次先生の活動の偉大さに感銘を受けられ、高鍋藩校ブラスアカデミーを立上げる提案をされました。このことを受け、「石井十次セミナー」において、中・高校生の吹奏楽がオープニングで演奏するようになったことは、歴史と音楽が再び融合したようで大変喜ばしいことだと思っています。

バラ色の人生を夢見て始めたバラの栽培。実際はイバラの道からのスタートでしたが、それもまた人生の醍醐味。

モーツァルト音楽祭も関係者ととともにしっかりと歩み続け、今年で第20回という大きな節目を迎えます。地元の中・高校生も一緒になり素晴らしい演奏を披露してくれるものと期待しております。皆様も是非とも足をお運びいただき、そこでしか味わうことのできない演奏を、石井十次先生の意志がここへも繋がっていることに思いをはせながらお聴きいただければ幸いです。

ぼぼのはるあさばんがっこう
石井十次と馬場原朝晩学校

石井十次が岡山医学校時代に郷里に設立した馬場原朝晩学校について、くわしく知りたいと思っていた。いくつかの文献資料に断片的に書かれた内容を整理すると以下の通りである。

石井十次が岡山県甲種医学校に18歳で入学したのは明治15年9月である。20歳の夏、十次は新島襄の「同志社大学設立趣意書」を読み感動する。新島は「良心をもって国を指導する人材を養成することが国家の急務」と説いた。これをきっかけに十次の脳裏に郷里の若者を教育する考えが浮かんだ。

夏休みに高鍋に里帰りすると、上江村の若者が歓迎の盆踊り大会を開いてくれた。終わると十次は挨拶に立った。「歓迎の盆踊りをありがとう、とお礼を言いたいところだが、僕はわが村の青年がこうした低調な行事に没頭することに憤慨する。残念で涙が出た。こんな踊りは今晚限りやめたまえ。これからは教育に力をつくそう」十次はそう叫んで、盆踊りの三味線の棹をへし折った。

翌日から十次は考えを実行に移した。「馬場原教育会」の設立に向けてみずから「趣意書」を書き、村内を戸別訪問した。39戸の賛同を得て教育会会則をきめ、馬場原朝晩学校の発会式を行った。明治17年8月6日のことである。対象となる青少年(含女子)は189名であった。会則の内容は「他国遊学生捐資規則」「馬場原朝晩学校規則」「書籍部規則」から成る。以下に前2規則の要旨のみを示す。

他国遊学生捐資規則：各有志者棄金高に^{ききんだか}応じ、まず1名より漸次数名を他国(他県)に遊学せしむ。年齢18歳以上にして家政困難のためその志を^と遂ぐる能^{あた}わざる者に限る。

馬場原朝晩学校規則：本校は教育会有志者より^{せんき}捐棄せる諸穀並びに^{しよこく}諸器具をもって貧家の子弟を寄宿養育せしめ、朝夕両度学齡子弟に読書を教授する所なり。校長1名、世話人2名を無給にて置く。

夏休みが終わると、十次は「他国遊学生」を岡山に同行した。渡辺栄太郎、石黒岷十郎、押川亥之吉、岩村加治郎、萱嶋諸秀の5名である。彼等の家庭は貧しく学資は出せない。十次は5名を漢学塾に通わせ、生活費は十次が面倒をみることにした。十次の苦労がはじまる。十次はこのころ、岡山の牧師・金森通倫^{つうりん}によって洗礼をうけ、その教会で十次の事業の生涯の支援者となる炭谷小梅女史に出遭う。

明治19年になると十次は生活費のために借金がかさみ、進退窮まる。そこで医学の知識を生かして^{あんま}按摩をすることにした。夜になると辻々を笛を吹きながら流して歩く。強気の十次も恥ずかしさで足がすくんだという。ある晩、二階から「おい、按摩」と声がかかった。はじめての客はやくざの親分かと思えた。十次が慣れぬ手つきで懸命に按摩をしていると、「目あき按摩め、苦学生だな」と見抜かれてしまった。客は近くの芝居小屋の壮士芝居の役者で、若い頃に青雲の志を抱いたこともあるという。彼は意外に親切で、按摩賃をはずんでくれた。十次の経歴で後に有名になる「目あき按摩」の一件である。

しかし、目あき按摩はたいした稼ぎにはならず、借金はふくらんで行った。心痛のあまり、十次は「^{のうびょう}脳病(ノイローゼ)に陥る。窮地を救ったのが炭谷小梅である。彼女は岡山医学校長菅之芳をたずね、十次の窮状を訴え、援助を頼んだ。菅は「わが校にそんな篤志の学生がいたのか」と驚き、自宅に書生として^{すがゆきよし}住ませた。十次は浮いた食費を借金返済にあてる。高梁^{たかはし}の裁縫塾で学んでいた妻・品子を岡山に呼び戻した。品子は炭谷小梅と同居し、織物工場まで夜勤までして懸命に働き、借金を返済した。

5人の遊学生は、岡山での苦学を貴重な経験として、自立した道を歩んだ。渡辺は同志社に入学して牧師に、石黒は鹿児島県で林務官に、押川は小倉師団で二等主計になった。岩村は師範学校を出て教師となり、萱嶋は台湾に渡って活動した。馬場原朝晩学校の教育理念は活かされたのである。朝晩学校は岡山孤児院設立まで存続し、その使命を終える。「他国遊学」は上記の5名で終わった。

(編集委員 石川 正樹)

(参考資料：石井十次 柿原政一郎著、信天記 西内天行著、石井十次 黒木晩石著)

《 お し ら せ 》

★新会員のご紹介（敬称略）

【木城町】 吉瀬 重嘉
【門川町】 甲斐 薫
【宮崎市】 齊藤 武志

★ご寄付をいただきました（敬称略）

【鳴門市】 宮城 正行

★1/21～2/20 の資料館来館者 団体・グループ

【高鍋町】 高鍋高校 21人
個人 23人 合計44人

ここまでの掲載者は編集委員会開催の都合により2月20日までのものとしています。

★3月の行事

・友愛社 卒園お別れ会
3月21日（土）20:00～ 友愛園

★4月号の通信発送作業

4月13日（月）9時から印刷・製本
14日（火）9時から製本・発送

この会報は、宮崎県を中心に全国1700余の個人・団体に毎月送付しています。

社会福祉法人 石井記念友愛社
後援会「石井十次の会」

☎ 884-0102

宮崎県児湯郡木城町大字椎木 644-1
TEL/FAX 0983-32-4612
メール
yuuaisya-jyuujinokai@ki-jo.jp

○郷土新聞に署名活動を

後押しする投稿あり

1月30日付け宮日新聞窓欄に児嶋理事長記「ゆうあい通信」を読んでの投稿文が掲載されていました。

題名は「乳幼児施設の制限削除願う」です。私たちが推進した署名活動と合致する内容であり心強い限りでありました。

この投稿氏とは知人でもありお会いする機会がありました。氏は元高校長です。

氏の談…当時、友愛園からの通学生も受け入れたが立派に卒業していった。園長・指導員の先生方の指導のたまもの。

とのことでした。

それを聞かせていただくだけで心温かくうれしくなりました。

○児嶋理事長の講演会に参加

2月2日、宮崎県郷土先覚者講演会で我が理事長が「石井十次」について講演されました。十次の教育・福祉文化を現代の教育・福祉文化に生かす内容。

キーワードは「文化」。

文化とは、人類（ここでは十次と読み替える）が永年英知を注ぎ込み創り上げてきたクリエイティブなもの。

その文化とは

- ① 親（それに代わる）の愛情
- ② 志を育む教育
- ③ 佳き出会いへの準備

を強調されました。理解し賛同する講演会でした。

○編集後記

「むつび」巻頭は川南町長 日高昭彦氏の玉稿です。ありがとうございます。

平成から令和に代替わりした今年度も今月をもって終わります。原稿を下された方々に感謝。そして新しい年度もどうぞよろしくお祈いします。

編集委員 竹之下